

## 特集：ウガンダの活動

FOCUS ON UGANDA

Newsletter  
June 2024

## 1. ウガンダ事務所長 メッセージ

## 親愛なる SAA パートナーの皆様

本号では、ササカワ・アフリカ財団（SAA）ウガンダ事務所の活動と成果を中心にお届けします。

私たちは、日本財団や日本外務省を始めとするはじめとするさまざまなパートナーの支援を受け、ウガンダの農家の農業技術と生活向上、食料安全保障に貢献すべく、環境再生型農業、栄養に配慮した農業、市場志向型農業を戦略の柱とする取り組みを推進してきました。

パートナーシップにより農村の暮らしに変革をもたらした事例として、ウガンダ国家標準局（UNBS：Uganda National Bureau of Standards）と連携したイニシアティブを取り上げています。農産物の取り扱い、標準化、認証に必要なスキルを農家が習得できるよう支援し、コミュニティにおけるアグリビジネスの活性化に貢献する事例です。

また、多数の農家個人や農家グループの物語を紹介していますが、それは SAA のスローガンである「農家と共に歩んで（“Walking with the Farmer”）」に込められた使命、つまり小規模農家のエンパワメントを体現するものであり、SAA の活動における協働、革新、そして強靱性のインパクトを感じていただけるでしょう。

ティー・アポロ・セル村のアルム・スコビアさん（42 歳）は、夫を亡くし生計を立てるのに苦労していましたが、SAA の支援するバラ女性・青年協同組合との出会いを通じ、アグリビジネスを創造し、収入の向上と家族の栄養改善を実現しました。また、4 児の母であるママ・サラさんは、SAA の研修をきっかけに環境再生型農業とポストハーベスト管理技術を習得し、収量と収入を向上させ、子どもたちの教育環境と家族の生活水準を向上させました。

キハンダ・トゥコレニエンタ農家グループもまた、環境再生型農業の実践とジェンダー・インクルージョンを実現し、グループの収入を向上させるとともに、コミュニティの結束を強化しました。

農家を取り巻く環境に目を向けると、気候変動は最も差し迫った課題の一つです。本号では、気候変動への対応、コスト削減、土壌の健全性向上のために環境再生型農業を取り入れ、生物多様性と収量の持続的な向上に成功したセルワダ・サイディさんを紹介しています。彼は、13 人の子どもの父親です。

このような農家一人一人の物語を通じて、SAA が活動のミッションとする農家の収入や栄養の改善、暮らしの向上が各地域で実現していることを感じていただけるでしょう。コミュニティに力を与えることで、私たちはウガンダ全土に進歩と繁栄の種を蒔いているのです。

最後に、ウガンダ北東部に位置するカラモジャ地域に小麦（改良品種）の栽培を導入する取り組みを紹介しています。SAA は、干ばつに強い品種をカラモジャのモロト地区に届け、同地域の厳しい気候への適応性を試験しました。本イニシアティブは、ウガンダ全土の食料安全保障、経済成長、雇用創出、生活水準の向上に貢献するものと確信しています。

最後になりましたが、パートナーの皆様の継続的な支援に感謝いたします。これまでの成果を評価し、さらなる取り組みにつなげていきます。

Robert Anyang  
SAA ウガンダ事務所長

## 本号の内容

### 1. SAA ウガンダ事務所長メッセージ... 1

### 2. 現地からの声... 2

ウガンダの農家、持続可能な RA 農法でトウモロコシの収量を 46% 向上

農業アプリ「EzyAgric」がウガンダの農村の暮らしを変える

「栄養に配慮した農業（NSA）」をきっかけに開花したウガンダの農家グループ  
協同組合に出会い、農業をビジネスに転換したアルム・スコヴィアさんの物語

### 3. 活動報告... 5

環境に配慮した安全な農薬の使用に関する研修を実施

小麦が変わるカラモジャ地域の農家の暮らし

適切な収穫後管理がより良い販売につながる

### 4. その他の活動国からのニュース... 6

ナイジェリアとベナンでグリーン・フィールドデー開催、農家に環境再生型農業の効果を実証

ナイジェリアのポストハーベスト展示会で KSADP プロジェクトの取り組みを紹介

エチオピアでの会合、地元の農業投入材の生産拡大を探る

※本ニュースレターは、英語版オリジナル(URL: <https://saa-safe.org/newsletter/june-2024/>) の翻訳版となります。

## 2. 現地からの声

### ウガンダの農家、持続可能な RA 農法でトウモロコシの収量を 46% 向上

キボガ県キバンガ村に住むセルワダ・サイディさん（46 歳）は、13 人の子どもの持つ父親です。彼は長年、耕起を繰り返し、自家採取の種を利用する従来型の単作農業を行ってきましたが、年々土壌が劣化し、収量の低下とコストの増加を招いていました。2020 年、ササカワ・アフリカ財団（SAA）の研修プログラムに参加したセルワダさんは、最小耕起、間作、マルチング、有機肥料、総合的病害虫管理、認証種子の利用など環境再生型農業（RA: Regenerative Agriculture）の技術を学びました。そして、この研修が大きな転機となります。

彼は 2021 年に 0.5 エーカーの試験圃場を 2 カ所設け、1 カ所は RA、もう 1 カ所は従来型の農法でインゲンマメを栽培しました。その結果、RA を実践した圃場はもう一方の圃場に比べ収量が 200kg 増加、SAA の奨励する土壌肥沃度総合管理アプローチに沿って肥料と農薬の使用を最適化し、生産コストは 40% 削減されました。その翌年は、

さらに RA の栽培面積（トウモロコシとインゲンマメを混作）を拡大し、トウモロコシ 1,500kg とインゲンマメ 550kg を収穫し、240 万 UGX（682 米ドル）の収入を得ることができました。トウモロコシとマメの混作は、単一栽培に比べてトウモロコシで 46%、インゲンマメで 26% の収量増加が確認できました。



2023 年、セルワダさんのトウモロコシ収穫量は 4,000kg に達し（2 エーカーの圃場）、収入も大幅に増加した一方、生産コストは 30~40% 削減することができました。SAA は、サイディさんをコミュニティ普及員

(Community-based Facilitator) に任命。現在、セルワダさんは、他の農家に RA 技術を指導する役割も担っています。彼は今後、RA 農場を拡大し、畜産を組み込むとともに、農場の生産性のさらなる向上を計画しています。

全文はこちら：<https://www.saa-safe.org/news/news.php?nt=2&vid=593&lng=jpn>

## 農業アプリ「EzyAgric」がウガンダの農村の暮らしを変える

ウガンダのムベンデ県マドウドゥ郡ルテテ村では、Akorion 社が開発したスマートフォン向け農業アプリ「EzyAgric」を活用した農業普及が成果を上げています。同村の農家が、EzyAgric によるガイダンスを実践した結果、トウモロコシとマメの収穫量が大幅に向上したと報告しています。

ドロシー・ナムリさん（41歳、7児の母）は、EzyAgric を通じて、栽培に関する適切なアドバイスを得られるようになっただけでなく、種子や肥料と言った農業投入材へのアクセスが可能となり、インゲンマメの収穫量が1袋から7袋（1エーカー当たり）に、トウモロコシの収穫量が4袋から11袋（1エーカー当たり）に増えました。そのお陰で、子どもたちにゆとりを持って教育を受けさせることができるようになったと言います。

同じ村のテオ・ムニェバンザさん（37歳、7児の父）は、EzyAgric を通じて環境再生型農業の実践と適切な施肥技術を学び、トウモロコシを18袋、マメを15袋、じゃがいもを22袋（いずれも1エーカー当たり）収穫できるようになりました。

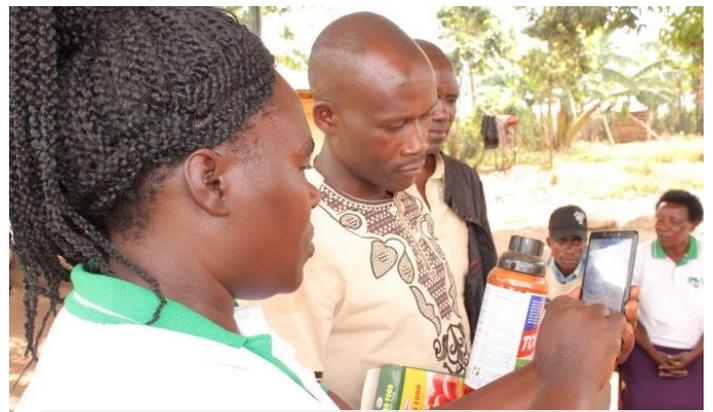
「収量が向上したことで、私は地域のモデル農家となりました。どの肥料や農薬を使うべきか、近所の人たちからよく助言を求められます」と彼は話します。



アイシャさんから投入材を購入する農家

ルテテ村の多くの農家は、地域推進員のアイシャ・ナキブレさん（44歳）を通じて、EzyAgric の存在を知りました。10人の子どもの母であるアイシャさんは、自身もまた農家として、土壌劣化と生産性の低迷などの課題を抱えていましたが、SAA の研修を受講し、EzyAgric のローカル・チャンピオンとして300人以上の農家に EzyAgric を紹介しました。彼女の活動により、2024年の最初のシーズンには2,600万UGX（6,922米ドル）相当の投入材（肥料や農薬）が購入され、彼女は20万UGX（54米ドル）の手数料を得ることができました。

「EzyAgric からの収入は、子どもの学費や家計を賄うのに助かっています」と彼女は話します。



EzyAgric で農業資材をオンライン注文するアイシャさん

## 「栄養に配慮した農業（NSA）」をきっかけに開花したウガンダの農家グループ

ウガンダの農家モーリン・カミルさん（64歳）は、2017年に7人の仲間とともに19米ドルの資金を元手に、キハンダ・トゥコレニェンタ農家グループを結成しました。同グループは飢餓、栄養失調、貧困といったコミュニティで共通する課題に対し、集団によるアプローチをスタートしました。

グループ活動の進展に課題を抱えていたカミルさんは、2021年にササカワ・アフリカ財団（SAA）が提供する「栄養に配慮した農業プログラム」に参加し、環境再生型農業や栄養に配慮した農業の先進的な実践技術や、付加価値の創造や事業の多角化といったビジネススキルを学びました。

カミルさんは、20人に増えたグループメンバーと研修で得た知識を分かち合いました。そして、バナナやミレットなどの在来作物から、生物学的栄養強化作物である鉄分強化豆やオレンジスイートポテト他、さまざまな野菜を取り入れより栄養価の高い作物を組み込んだ栽培へと、環境



バランスの良い食事について学ぶ女性農家たち

再生型農業の技術を実践しながら転換していきました。作物の多様化により、バランスの良い食事が可能となっただけでなく、農作物の収量にも良い影響を及ぼしました。

生産物の種類が増えたことで、同グループの収益は大幅に向上し、5か月間で合計1,460米ドルの貯蓄（設立当初は、一人当たり3米ドル/月の貯蓄）、1,062米ドルの融資を実行することができました。

全文はこちら：<https://www.saa-safe.org/news/news.php?nt=2&vid=595&lng=jpn>

## 協同組合に出会い、農業をビジネスに転換したアルム・スコヴィアさんの物語



ウガンダのコレ県ティーアボロ村に住むアルム・スコヴィアさん（42歳）は、2019年に夫を亡くし、一人で家族を養うという困難に直面していました。しかし、日本外務省の資金提供によりササカワ・アフリカ財団（SAA）が推進

するバリューチェーンセンター（通称ワン・ストップ・センター：OSCA）の一つである「バラ女性・青年協同組合」に出会い、自給的な農業をビジネスに転換することに成功しました。

同組合に参加したアラムさんはアグリビジネスの研修を受け、農業を自給自足的手段ではなく、実行可能なビジネスへと転換。地元の農家から落花生を購入し、加工販売する事業に着目し、2023年には組合の貯蓄グループから60万UGX（154米ドル）の融資を受けて起業に至りました。25万UGX（64米ドル）で手動の落花生殻むき機を購入し、自家栽培と地元農家から仕入れた落花生を用いて、加工事業に取り組みました。設備購入後の残りの資金は、協同組合のネットワークを活用した落花生の仕入れに投じ、コミュニティの活性に影響を与えました。

アルムさんの加工品は、品質の高さと清潔さから、村やリラ市で人気商品となりました。公正な価格戦略により安定した売上を確保し、子どもの教育費や食費など家族のニーズを満たすことができるようになりました。

アルムさんは組合の貯蓄グループから受けた融資を1年足らずで完済。落花生の事業運営に加え、試験圃場の手入れや植え付け、収穫作業など組合の活動にも積極的に参加しています。貢献の対価として、ささやかな報酬を受け取っています。アルムさんは現在、落花生の加工能力向上、オートバイ取得による流通の効率化、保存施設の建設や野菜の生産拡大など、さらなる事業の拡大と多角化を目指しています。

全文はこちら：<https://www.saa-safe.org/news/news.php?nt=2&vid=596&lng=jpn>

### 3. 活動報告

#### 環境に配慮した安全な農薬の使用に関する研修を実施

研修を終えて証明書を手にする参加者たち



2024年3月、ササカワ・アフリカ財団（SAA）はウガンダ農業畜産水産省（MAAIF）と協力し、農業資材販売業者のキャパシティ・ビルディングを目的とした、環境に配慮した農薬の安全・適正な使用にかかる5日間の研修プログラムを実施しました。

同研修には、県をまたいで21名（女性9名）の農業資材販売業者が参加し、農薬の種類、安全な散布技術、効果的な害虫管理、農薬規制など幅広い基礎知識を身に付けました。また、農薬の適正な管理と使用が、気候変動の緩和と地域の食料安全保障の強化に貢献することを学びました。

研修は、マケレレ大学が開発したプログラムに沿って、座学と実習が行われ、修了者には、責任ある農薬の取り扱い能力を証明する証明書が授与されました。

本研修の様子は、ウガンダの公共放送 UBC で放送されました：[https://youtu.be/XjCSvXT-T\\_s?si=xAhVhlHlLqR-80Hq](https://youtu.be/XjCSvXT-T_s?si=xAhVhlHlLqR-80Hq)

#### 小麦が変えるカラモジャ地域の農家の暮らし



カラモジャ地域は、ウガンダ北東部に広がる半乾燥地帯で、人々は放牧を生業に生計を立てています。2024年4月、ササカワ・アフリカ財団（SAA）は、カラモジャ地域で活動する [NPO マテニコ開発フォーラム（MADEFO）](#) やウガンダ開発フォーラム（UDF）と連携し、同地域に小麦の栽培を導入しました。

小麦はウガンダの食料生態系、特に小麦粉を加工したパンやマフィンなどのベーカリー部門にとって不可欠な作物であり、同地域の都市化や食生活の変化に伴う需要の増加が予想され、栽培ニーズが高まりつつあります。

カラモジャ地域は、小麦の生産に理想的な広大な土地であり、生産が本格化すれば、農業生産性の向上、食料安全保障と生計の向上、雇用機会の創出、農家の生活水準の向上が期待されます。

「このイニシアティブは、当初は小麦の導入を余り評価しなかった人からも支持を獲得しています。」と MADEFO のジェレマイア・ロジット事務局長は話します。

同取り組みでは、干ばつに強い3品種（Angeno 1、Angeno 2、Angeno 3）が選定され、モロト地区で試験栽培されています。

小麦の収穫期が近づいていますが、生育は良好。猛暑と干ばつが厳しいカラモジャ地域で、緑の小麦畑が広がる光景は、同地域の希望の象徴となっています



SAA が提供した小麦を播種する様子（モロト地区）

#### 適切な収穫後管理がより良い販売につながる

2024年3月19日～24日、ササカワ・アフリカ財団（SAA）とウガンダ国家標準局（UNBS）が連携し、作物の収穫後処理と品質管理に係る包括的な研修を実施しました。

研修は、講義、デモンストレーション、実習のセッションで構成され、実習では、アフラトキシン検査や含水率測定などが行われ、参加した農家は、講義で学んだノウハウ

品質管理の実習の様子



を実際に手を動かして試すことで理解を深めました。

3日間の研修には、ウガンダの農家85人（女性35人）が参加しましたが、4児の母であるママ・サラさんは、知識の習得に特に熱心でした。研修を受講した彼女は、自分の作物を最適な販売のために適切に保存する力が得られたと感じていました。

「この研修は目からウロコでした。私たちがどれだけ損失していたか今まで気づいていませんでした。今では、自分の作物を適切に保存し、より良い価格で販売できる自信があります」と彼女は話します。

座学で知識を深める参加農家



## 4. その他の活動国からのニュース

### ナイジェリアとベナンでグリーン・フィールドデー開催、農家に環境再生型農業の効果を実証

ササカワ・アフリカ財団（SAA）は、ナイジェリア（4月23日～28日）とベナン共和国（5月28日～30日）の

合計7つの地域で、グリーン・フィールドデーを開催しました。同取り組みは、アフリカ開発銀行（AfDB）の支援によるプロジェクト「アフリカの気候変動に対応するための科学的根拠（エビデンス）に基づく環境再生型農業プロジェクト」の一環です。

ナイジェリアのナサラワ州で開催されたグリーン・フィールドデーには、ドマおよびラフィア地方行政区から382人（女性129人）の農家が参加しました。

SAA ナイジェリア事務所のゴッドウィン・アサー所長は挨拶の中で、気候変動が農業生産性に与える影響に触れ、レジリエンスを高める上で環境再生型農業が果たす役割を強調しました。

フィールドデーにおける刈り取りのデモンストレーション



農家は、SAA の試験圃場で持続可能な農法や改良技術（高収量のコメやトウモロコシの品種、バイオ炭の施用、尿素スーパーグラニュールの深層施肥、灌漑技術、苗の定植技術、マルチング）の効果を目の当たりにしました。SAA のテクニカル・スタッフは、これらの実践が収量を向上させるとともに土壌の健全性と肥沃度を高め、土壌中の炭素を固定して気候変動を緩和することを説明しました。

参加した農家は、実演された改良技術に高い興味を示しました。ある男性農家は、コメの改良品種（FARO66）の分けつ能力の高さに注目し、収量の増加を期待しました。また、ある女性農家は、男性農家の意見に賛同し、来シーズンは自身の圃場でこうした技術を採用することを希望しました。

ベナンのゾグボドメイ地区、レレ地区、ラロ地区においても同様のフィールドデーが開催され、164人の農家（女性49人）と16人の自治体関係者の参加のもと、コメの高

収量品種や生産拡大を目的とした改良技術が紹介されました。

これら一連のフィールドデーは、持続可能な農業を推進し、アフリカの気候危機に立ち向かう実践的な解決策を農家に提供するという SAA の取り組みを実証する機会となりました。

フィールドデーに参加した女性農家（イェルワタ・ウージ村）



フィールドデーにおける密閉式貯蔵袋のデモンストレーション



## ナイジェリアのポストハーベスト展示会で KSADP プロジェクトの取り組みを紹介

2024 年 4 月、ナイジェリアの [食品保存研究所 \(NSPRI\)](#) の主催による第 1 回ポストハーベスト展示会が首都アブジャで開催され、SAA は、[カノ州農牧畜開発プロジェクト \(KSADP\)](#) を通じて推進するポストハーベストに関するさまざまな取り組みを紹介しました。

SAA ナイジェリア事務所のゴッドウィン・アサー所長は、同プロジェクトを通じて推進するポストハーベストの取り組みに触れ、カノ州の小規模農家が収穫後管理に必要な施設や技術にアクセスできるようリンケージを強化するとともに、州内各地のコミュニティに農作物の加工・貯蔵能力を備えた施設を整備していると述べました。



同イベントにおいて、SAA のプロジェクト・コーディネーターであるアブドゥルラシド・ハミスは、収穫後ロスに関する包括的な取り組みを発表し、通気によるタマネギの保存システムや太陽光を利用した野菜乾燥設備の導入、農作物脱穀機の提供、州内 44 自治区における精米・製粉センターの設立などを紹介しました。また、5 つの自治区で農産物加工センターが設立され、139 人がオペレーターとしての研修を受けていると話しました。

同プロジェクトは、ポストハーベストに関するインフラ整備だけでなく、農家や加工業者を対象としたキャパシティ・ビルディングも実施しています。収穫のタイミング、作物の乾燥技術、品質管理、穀物乾燥などさまざまなテーマに沿った研修を行い、地域の適切なポストハーベスト管理の普及に努めています。

パネルディスカッションに登壇した SAA ナイジェリア事務所のガンボ副所長



## エチオピアでの会合、地元の農業投入材の生産拡大を探る

エチオピアの農業は、国外から輸入による投入材（種子や肥料など）に依存しています。しかし、ロシアのウクライナ侵攻など世界的な緊張により、これらの農業投入材は価格が高騰かつ不足しています。また、投入材による環境や健康に対する影響への関心も高まりつつあります。こうした課題に対処するため、ササカワ・アフリカ財団 (SAA)

は、2024年5月、エチオピアのアダマで「地域における農業投入材の持続可能な生産、商業化、利用（Harnessing Local Agricultural Inputs for Sustainable Production, Commercialization, and Utilization）」をテーマに会合を開催しました。同イベントは、地元の農業投入材の促進を議論の焦点とし、環境再生型農業、バイオ炭や有機肥料の生産などに関する意見交換が行われました。

SAA エチオピア事務所のフェンタフン所長は、コスト削減、外貨の節約、雇用創出の観点から地元の投入材を強化するメリットを述べました。また、SAAの戦略パートナーシップ・ディレクターであるメル・オルオチ博士はじめ多くの講演者が、伝統的な知見の重要性を認識し、意思決定プロセスや知識の共有に地元コミュニティを参加させる必要性を述べました。

エチオピアのアブドゥセメッド・アブド農業・園芸大臣は、遅れている地元の肥料・石灰製造工場の建設を急ぐ必要性を指摘しました。また、農家が必要とする農業資材を確保するため、地元産の投入材の活用を強化する重要性を述べました。

